

「名達の言葉／龍ヶ崎」(KGK 研修会資料)

広報委員会が、今年度の会員権業者様との研修会資料として作成しました。主として「龍ヶ崎カントリー倶楽部 60 年の歩み」から取り纏めたものです。

《名プレイヤーからの評価・コメント》

1. S.36. 11 月／関東プロ月例競技
 - ・ 優勝／栗原甲子男（小金井）：「レイアウトが特に素晴らしい。ただ 5 番に向かって一番左のバンカーは疑問。」
 - ・ 陳清波（東京）：「ナイスショットをすればそれだけ良い結果が、ミスショットそれだけ悪い結果が出る、不合理が絶対ないコース。」
2. S.36. 4 月／サム・スニード & 林由郎組と中村寅吉 & 小針春芳組の 4 ボールベストによる 18 ホールダブルス（神様スニードと中村は 32 年の第 5 回カナダカップで対決）
 - ・ スニードのコメントは残っていないが、帰国後ある雑誌に日本の印象記を載せ、“龍ヶ崎のすばらしさ”を記した。
3. S.37.10 月／英国のトップアマ、ロニー・シェードが来訪。彼は前年の川奈における世界アマ選手権の 5 位であるが、上記のスのニードの龍ヶ崎の印象記を読んで、いつか必ず龍ヶ崎でプレーしようと思っていたという。
 - ・ シェード：「本当に良いコースだ。コース内に電線も田圃も見当たらない。英国でも有数のゴルフ場の一つに入るだろう。バラエティに富んだ各ホールの面白さもさることながら、手入れが実に良くいき届いている。ラウンド中、度々バーディーチャンスを逃したが、それは自分の技術が至らなかったからで、グリーン自体はデリケートな起伏があり実に攻め方が難しい、それだけ攻め甲斐がある見事なものだと思う。」
4. S.38.5 月／日本プロゴルフ選手権
 - ・ 優勝／橘田規（廣野・3 アンダ）：「3 パットをせずに済んだので勝てた！」
 - ・ 参加者と報道陣の一致した評価：「フェアウェイとグリーンのコンディションが他に誇りうるものであった。」
5. H.4.10 月／第 57 回日本オープンゴルフ選手権
 - ・ 優勝／尾崎将司（11 アンダー、5 打差）：「龍ヶ崎は自分向きにできている。グリーンも大きく、有利な条件が重なった。このコースは落とし穴も多く難しいがやりがいがある。練習ラウンドから優勝は自分しかないと信じてプレーに没頭した。」

- ・法政大学／田中義久教授のコメント（翌日の毎日新聞夕刊）

「最初は青木やジャンボのプレーを見ていたけれど、そのうちこのコースの見事なレイアウトに目を奪われた。日本にもセントアンドリュースやオーガスタに匹敵するコースが存在することに気づいた。」

6. H.5.10 月／“ミスターゴルフ”バイロン・ネルソン来場（当時 81 歳）

- ・「本音を申し上げますと、私が日本でプレーした中で最高のコースでした。景色も本当に美しいと思いました。RCC は大変素晴らしいコースです。」

7. H.8. 6 月／第 27 回日本女子オープン

- ・小林浩美（アメリカから一時帰国。19 位）：「RCC には今回初めての来場ですが、過去のオープン競技の中で最難関のコースでした。アメリカのコースと異なり、芝が硬く、コースのデザインがタフで、日本にはまれな優れたコースです。他日ゆっくり挑戦したい。」
- ・優勝／高村亜紀（3 オーバー）：「この大会に勝つことが夢でした。この難しいコースで勝てて本当に嬉しい。次はぜひ世界に挑戦したい。」

8. H.21.6 月／第 109 回全米オープンゴルフ選手権最終予選会

- ・優勝はデービット・スミイル（-11）、3 位タイに横尾要と甲斐慎太郎（-5）。注目の石川遼プロは練習ラウンドが無く、18 位タイ（イーブン）に。エースキャディの加藤大幸氏（H.16 年の日本アマで龍ヶ崎の経験あり）は、「遼くんがこんなにドライバーを使わなかったコースは初めてです。」と語っていた。

9. R.6.9 月／日本オープンゴルフ選手権東日本最終予選（2 日間）

- ・-10 で野呂涼、中山絹也両選手が首位通過。バンカーが抜群だった熟練の時松隆光プロ（-6、10 位タイ）は、「素晴らしいです。戦略的で、ドローとフェードの両方を使わないと攻略できない厄介なコースです。」と素晴らしい！連発でした。前年（'23 年）の日本アマを取った早大の中野麟太郎選手（同上 10 位タイ）は、何度目かの龍ヶ崎で、「グリーンは以前より遅めでしたね。今日のラフなら問題ないですが、本番仕様だと相当難しいでしょうね」と語ってくれました。河本力選手は、「良いコースです。難しかったです。」のあと、最難関の一つ 9 番について、「初日の 9 番は谷越えて 340 ヤードの飛距離が必要でしたが、今回可能なのは自分だけだと思い、フォローだったので狙いました。今日はアゲインストなので、確実に手前に刻みました」と 2 日間バーディー。

10.R.7.5 月／関東アマチュアゴルフ選手権決勝

- ・内藤正幸競技委員長（日大 OB）：「RCC には浅からぬ縁があります。1979 年の関東アマの最終日の 18 番で、羽川選手に 1 打リードを逆転されて 2 位になりました。その後の精進の礎となり、'81 年の日本アマで優勝できました。関東アマは、関東倶楽部対抗に次ぐ古い競技です。この伝統ある試合を RCC で開催できることに感謝しています。是非とも、関東女子ゴルフ選手権も受け入れていただきたいと思います。」

- ・小沢優仁選手（－4で3位タイ/中学2年、身長160cm。'IMGA世界ジュニアゴルフ選手権10～11歳の部で準優勝）：「距離がありますね。特にグリーンが難しかったです。皆、苦勞していました。」

《コース設計者からの評価・コメント》

1. 井上誠一（RCC 設計者）

- ・龍ヶ崎が良いコースになった理由はその生い立ちです。地形はゴルフコースとして申し分ありませんし、樹木も割合豊富でした。当時、交通の便は悪かったのですが、コースそのものの立地条件はだいたい百点満点で、私も惚れこみました。事前の準備工作もスムーズに運び、用地の使用範囲もこちらに任されたので、どれだけ良い仕事ができただろうか！これらが良いコースができた原因だと思います。（会報龍ヶ崎 26 号、S.43 年 12 月）
- ・亡くなる 2 年前（'79 年、71 歳時）、著名スポーツキャスターの佐々木信也氏のインタビュー中、「一番気に入っているコースは？」の質問に答えて。 → 「ゴルフコースの良さはその場所の立地条件に左右されますから、立地条件の良い所でやらせてもらったのが、結果的に良いコースになっています。そういう意味では、大洗とか龍ヶ崎が良いと思っています。名古屋の南山も割合気に入っています。」

2. 大久保昌（初代グリーンキーパーで井上氏の一番弟子、日本ゴルフ場設計者協会名誉理事）

- ・「龍ヶ崎は井上さんがその時代に作った“文化遺産”と考えるべきです。安易な改造はダメです。改造するところは何もありませんから龍ヶ崎はとても幸せです。この伝統あるクラブをぜひ守っていただきたい。」（H.15.5 月、会報龍ヶ崎 126 号「名コースはいかにして造られたか」）

3. 大塚和徳（著名なゴルフ歴史家・評論家、日本ゴルフコース設計者協会元理事長）

- ・「井上誠一設計の約 40 のコースの中で、龍ヶ崎が最も理想的にでき上ったコースと言われている。歴史的な設計家に共通するのは、全て自然の地形を尊重したことである。私にとっても、独特な地形と優れた造形美を持つ龍ヶ崎はすべてが印象的で、思い出すのに苦勞はない。」（同上、126 号、「名コース龍ヶ崎 CC でのプレーに寄せて」より）
- ・「原地形を大切にしました人です。日光 CC の場合は『日光にぜひ一つ欲しい、というので、ここしかないという所に作ったんだ、ということをちゃんと認識してください』と伝えたそう。一方、龍ヶ崎の場合は、『ぜひ私にやらせてください』と自分から言ったのは、有名な話。40 ほどのコースを造ったが、龍ヶ崎が一番気に入っているコースだという話を大久保さんから何度も聞かせていただいた。」（'14.5 月、新年の集い講演「井上誠一のコース設計思想」より）
- ・「私が日本のベスト 3 を挙げるなら、まず廣野 CC。2 番目は川奈ホテルの富士。3 番目は龍ヶ崎 CC ですね。地形が優れていることから設計者井上誠一が『私に造らせて』と言っただけあり、とても魅力的と言えます。（'21.5 月、GD 社チョイス 236 号「日本のベスト 100 コース発表」）

4. 中田浩人（日本ゴルフコース設計者協会副理事長、'24 新年の集い講演者）

・「(質問に答えて)龍ヶ崎 CC で改修すべきところはないですね。今回何度も廻りましたが、今日見てもとても良い。一つだけ思ったのは、樹木をどう伐採していくか、どう梳いていくか、それが最大のテーマだと思います。」('24.7 月、会報龍ヶ崎 172 号、「新年の集い特別企画」より)

《ツェーグリンについて》

1. 井上誠一の言葉

・「本ツェーグリンをベントにしたのは、龍ヶ崎には大きなチャンピオンシップ競技を開催して欲しかったからで、そうするとシーズンは春・秋ですから、この時期に大久保君の骨折りでベントを良い状態にしてもらって大きなイベントはベントで、と考えたわけです。またツェーグリンの広さは標準です、最近の標準です。」(座談会「コースを語る／井上誠一氏を囲みて」S. 43. 12 月会報 26 号より)

2. 大久保昌(前出)

・「龍ヶ崎は最初から 2 ツェーグリンの設定で作られました。昨今、1 ツェーグリンの議論も色々ありますが、龍ヶ崎の今までの評価もツェーグリンの良さを理解してのものです。日本の気候にもふさわしい。私は、2 ツェーグリンは戦後の文化遺産だと言っています。それを龍ヶ崎が守らずに、どこが守るか。ぜひ龍ヶ崎だけは守って欲しい。」(H.14.5 月&9 月、会報 123 号&124 号「名コースはいかに作られたか」)

3. 大塚和徳(前出)

・「名コース愛好家の一人として龍ヶ崎に期待することは、できるだけ原型を崩されずにいつまでも存続することである。ただ気になるのは、昨今の 2 ツェーグリン方式に対する軽薄な論評である。設計段階から堂々とした独立する 2 つのツェーグリン方式を採用した龍ヶ崎等は、2 ツェーグリンの持つゲーム上の問題点を設計段階で解決している。『2 ツェーグリンは時代遅れ』という単純な批判は、もっと吟味してかかる必要がある。名匠の作品からは凡人の手を控えさせなければならない。(H.15.5 月、会報 126 号より)

・「この龍ヶ崎 CC は、コースの設計段階から 2 ツェーグリンとして造られた戦後最初のコースである。フェアウェイのハザードはいずれのツェーグリンにも効くように工夫され、ツェーグリンの形状、起伏、その周辺も一貫した戦略的設計である。昨今、2 ツェーグリンへの軽薄な批判も多いが、どんな批判があっても、このコースはモニュメントとして永久に残すべき 2 ツェーグリンの芸術品である。(著書「日本のゴルフ聖地 100」より)

4. 中田浩人（前出）

・「龍ヶ崎さんが1グリーン化を決断するかどうかの判断は非常に難しいと思います。まずメンバーの総意として原型に対して何の違和感を持っていないこと。次に、井上誠一氏の設計コースの中でも、龍ヶ崎の完成度の高さは秀でており、2グリーンの良さを存分に楽しめる設定となっているから。3番目に費用面があります。今後のゴルフ人口の減少を考えれば、そのリスクには慎重になるべきです。最後に、龍ヶ崎の場合、プレー上の危険性や難易度の差がそれほどなく、サブグリーン的な存在感を持つことなく同様に楽しめる要素を持っているという点から。総論とすれば、資金面のリスクや今の姿で戦略性を飛躍的に上げるデザインがなさらなければ、龍ヶ崎CCにおける1グリーン化は意味がないと感じます。」（'24.7月、会報172号、「新年の集い特別企画」より）

以 上